
AKARI

政咲（改）

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AKARI

【Nコード】

N2084U

【作者名】

政咲（改）

【あらすじ】

不運の事故により自信を失った高校生『桑原透一』は聖女と呼ばれる謎の少女アカリと遭遇する。アカリを中心に巻き起こる奇想天外な争奪戦。魔法使いを相手に透一はアカリを守るのか!? これは少年の『再生と成長』の物語————— クリムゾンブルーシリーズ。桑原透一編。

プロローグ

あれは中学三年の夏。バスケの中体連を目前に控えていた頃だった。

あの頃は、明日の自分がどんな状態になっているのか何て考えもしなかった。

三年に上がってバスケ部の部長になった俺に、こんな悲劇が迫っていたなんて…。

「おい、桑原くわはら！ 帰ろうぜ！」

部員の仲間といつもの様に下校した時だった。

夕日が沈んで空は夜に変わっていた。爽やかな風が吹いていた。風に吹かれる度に、体から流れ出ている汗が止まるのが分かる。

時刻は午後の七時半。練習に熱が入っていつもより長引いてしまった。

「…なあ、桑原は高校どこにした？」

「俺？ 俺は『西高』か『下田』のどっちかな…」

「どっちもバスケの推薦で行ける奴だよなあ？ 羨ましいなあ…」

俺を入れて三人で歩いたタイルの歩道。今となっては不幸の元凶でしかない。

当時の俺は学校の進路に悩む必要はなかった。早くも高校から推薦を貰っていた。

春の新人大会を優勝した俺は、地元で注目される名プレイヤーの一人だった。

「『下田』の練習はキツイとか言ってたけど大丈夫か、桑原？」

「ああ…一回だけ『下田』の練習に参加したけど、言う程でも無かったぜ？」

「やっぱり強い奴は言う事が違うな…俺にその才能を分けるよ！」

一年の頃からレギュラーとして試合に参加していた俺は高い実力を発揮していた。

長距離からのシュート。得意のスティール。素早いリバウンド。繊細なパス回し。

『勝利のガードセンター』。誰かが俺にそんな通り名を付けた。恥ずかしかった。

「やだよ。これやったら俺には何も残らないから……」

「ごめんよ！ 何だよ…暗くなるなって！」

俺にはバスケットだけだった。バスケットだけが俺の全てだった。

特に何かが出来るとしても出来ない訳でもない。そんな自分に嫌気が刺す時もあった。

今は「自分はバスケットが得意です！」って胸を張って言える事に誇りを持っている。

だから…バスケットは失いたくなかった。バスケットだけは……

「じゃーな、桑原！ また明日！」

「ああ、また明日！」

交差点で二人と分かれて俺は一人で家に向かった。

その途中で俺は、向こう側の歩道に渡る為に信号を待っていた。

赤い光が点滅して、緑の光へと変わった。

それを知らせる合図として横断歩道に音楽が流れた。

俺は何の躊躇いも無く、いつもの様にその歩道を渡った。

白い線を踏み越えて、俺は歩道を渡りきった。

——…その瞬間だった。

突然、目の前が真っ暗になってしまった。

自分も道も見えない暗闇の中を俺は一人で歩いていた。

俺は不安と恐怖を感じた。自分の中から何かが抜けて行く様な感覚を…。

必死になっても抜けてしまう。どうしても失ってしまう。

俺の中から何かが消える……——

「——ハッ……!？」

目が覚めた。すると見慣れない天井が目映った。

見慣れないベッドに見慣れない服。ここは県立の病院だった。

俺が歩道を渡り終える直前にトラックが突っ込んできたらしい。

飲酒運転で乱暴な走りだったと言う。俺は、そのトラックに轢かれてしまった。

退院する前に俺は母親からこんな言葉を聞かされた。

「……もう、バスケは出来ない」

右肩を骨折した俺は、その言葉を飲み込むのに時間がかかった。部長を止めてバスケ部を抜けた。それでも信じられなかった。

自分の誇っていたものが消えた。失いたくなかったものを失った。
そこで俺は初めて考えた。明日の自分がどうなってしまうのかを。
今の俺には何が残っているのかを……

そうして『勝利のガードセンター』は、バスケットボールから姿を
消した……

第一話 過去と現在

時期は七月の中旬。六月市むつきの淡い夕日あさやまが『浅山高校』を照らしていた。

真夏の暑さが漂う校舎の中で、2人の少年が人数の少ない渡り廊下を歩いている。

なぜ人数が少ないのか？ その答えは窓を完全に閉め切っていたからである。

この廊下の窓は鍵がなければ、絶対に開かない仕組みになっている……。

「暑いなあ…本当に暑い……—」

この時期の渡り廊下はとても蒸し暑い。ジリジリとした熱が廊下に籠っている。

真夏の蒸し暑さを、身を持って実感したいと言う人間は浅山高校には1人もいない。

校舎から体育館を繋ぐこの廊下を、嫌々ながら懸命に渡る2人の1年生がいた。

「なあ…透一さあ？」

前を歩く1年生が振り返った。その生徒の名前は『桑原透一』くわはらとういち

後ろから透一を呼ぶのは、同級生の『梅之考利』うめのたかとしである。通称トシ。

「何だよ？」

二人は1年生の中でも身長が高い方である。体格は透一の方が少し細い。

透一は額に汗を流した顔で考利を見る。考利も顔に汗を流している。

「どうして寮に入ったの？ 家は近い方なんだろ？」

「まあ、そうだけど……」

透一はYシャツの青いネクタイを外しながら、それに答えた。

「俺が事故に遭った事は知ってるだろ？　それで通学が大変になったんだよ」

この『浅山高校』は「学業優先」をテーマに今年から学生寮を開いている。

校舎の隣にある小さいアパートの様な建物。それが浅山高校の寮である。

今年から開かれただけに、寮に入ってくるのは1年生が圧倒的に多い。

「それって、透一の親が入れたのか？」

「自分から入った様なもんだね。うちの親はウザいからさ……」

透一はそのネクタイで顔の汗を拭き取りながら言った。視線は天井を見上げている。

「そう言うなよ。親が聞いたら泣くぞ？」

孝利は透一を真似してネクタイを外す。首元が一気に解放された。

「もう泣いてるから……今更どうでもいいよ」

透一は天井を眺めながら廊下を渡る。汗を拭いたネクタイをポケットに入れた。

孝利も真似して天井を見たが、透一と違って白い蛍光灯が眼に映るだけであつた――

渡り廊下を抜けた二人は体育館の2階に出た。2階は体育館の観客席と成っている。

「良いよなあ……高校のバスケット……」

透一は二階の手摺に肘を付いて下を見ている。気の抜けた声が孝利の耳に届いた。

体育館の1階では中体連を控えた運動部達が必死になって練習に励んでいた。

その中には男子バスケット部の姿も見えた。透一はそれに視線を向けている。

「透一は、中学の時に止めたんだよね？」

「ああ…今は足が悪いから派手には動けないんだよ」

透一の沈み気味になっていいる背中を見た孝利は、ふらっと思い出した様子で透一に尋ねた。

体育館に響く音と共に孝利の声が耳に届く。透一は振り向きもせずと言った。

「もしかして、もう一度バスケやりたいとか思ってたりするの？」

バスケ部の練習を眺めている透一は、その時は何も答えなかったが暫くして…

「……バスケはもう無理だよ」

透一は小さな声でそっと呟いた。その声は質問を投げた孝利には聞こえていない。

振り返ると孝利は横一列に並ぶ椅子の上で横になって目を閉じている。

「俺、過ぎた事は忘れたいから…ハハツ——」

そんな孝利を見た透一は、少し離れた位置にある席に力無く腰を下ろした。

目を閉じると音が聞こえた。激しい動きを見せるバスケの音が……。

それから数時間後。二階で熟睡している二人の元に一人の女子がやって来た。

彼女は首に掛けたタオルで頬の汗を丁寧に拭ってから大きな荷物を床の上に置いた。

「待たせてごめんね！片付けに時間がかっちゃって！」

彼女の大きな声が眠りに落ちていた透一を覚ました。

「ん？ああ、メイか…おいトシ、起きろよ！」

彼女の名前は『ふじくらめい藤倉命』。透一と孝利の親友に当たる人物である。通称メイ。

2人と違って藤倉は自宅から登校している。三人が顔を合わせるの

は学校のみである。

「アンタ達さあ…そこで寝ていると風邪引くよ？ 冗談抜きで！」

「夏に風邪になる馬鹿がどこに居るんだよ…ふあゝあ……」

透一は体を揺らして孝利を起こしてから立ち上がる。孝利はゆっくりと体を起こす。

「うう……って、おい、何すんだよ!？」

寝起きの体を伸ばす孝利の横腹に、片手で力強く突きを入れる藤倉。 「ねえ、何か言ってよ！ この私が来たんだからさあ！」

それを横で見ている透一。2人は共に同じ保護施設の出身である。

透一は孝利と藤倉が浅山高校に入学する以前からの幼馴染という事を知っていた。

「何か言えって……あれ？ もう女子バス終わったの？ なんか早くない？」

「大会のレギュラーじゃない人はこの時間までなの。まだ初心者だから……」

透一から見て藤倉の運動性は高い方だった。バスケットの上達も時間の問題だと思われる。

「……寝るくらい暇なら、トシも部活やれば良いじゃん？ 野球部とかさ？」

「寮学生は部活への入部が禁止されてんの！ そもそも坊主頭とか嫌いだし……」

浅山寮は高校生活を「勉強」という2文字に専念する為に部活動は禁止となっている。

本来は寮に居る時間なのだが透一と孝利はそれを抜け出して藤倉の元に来ていたのだ。

「トシさあ、メイと付き合っちゃえよ！ 明日からデートでもしちゃえば？」

強引に2人の会話の間に入った透一。そうしなければ完全に空気と化してしまう。

冗談で口にした言葉にも言い過ぎというものはある。藤倉の目がそ

れを語っていた。

孝利からは呆れた視線を向けられた。慣れた事なので気にする様子は無い。

「お前なあ…今日でそれ何回目だよ？ 誰がこんなノンケ女と――

――」

「――悪かったですね！ アンタが嫌いな短髪の女で――！」

孝利の発言に苛立つ藤倉。確かに彼女の髪は2人の男子よりも短かった。

「何よ！？ 文句があるなら女子バスに来る？ 皆の前でそれ言う？」

「…いや、すみませんでした…僕が悪かったです。ごめんなさい！」
藤倉の強気の押しに呆気なく負けた孝利。それを見てケラケラと笑う透一。

「本当に仲良いね。2人は見ていて楽しいよ！」

「今のやりとりを見て、何でそんな言葉が出るんだよ？」

盛り上がる3人の会話の途中に、午後5時を知らせるチャイムが校内に鳴り響いた。

寮に入っている2人が外に出ていられるのは5時半まで。まだ時間は残っている。

「これからどうする透一？ 寮に帰るか？」

この後の事について透一と孝利が話していると藤倉が2人の間に入ってきた。

「ねえ…まだ時間あるから外に行かない？ 体育館の裏とか――」

外は暗くなり夕日も沈みきっている。暑い空気と共に涼しげな風がそつと肌を撫でた。

体育館の裏にはバスケットボール部が仕様するゴールネットが設置されている。

いつもなら上級生の生徒達が独占して使っているのだが、この時間は誰も居なかった。

「難しいな…やっぱり俺にバスケットは向いてないよ…」

「しっかり投げないから駄目なのよ！ ほら、もう一回やってみて！」

藤倉の指導の元でボールを投げる孝利。慣れていないのか中々ゴールの中に入らない。

孝利は運動が出来ない訳では無い。でも、どういう訳か昔から球技は苦手だったらしい。

藤倉の個人的な練習の為に来たのだが、気が付けば素人のシュート練習へと変わっていた。

「……なあ、そのボール貸してくれよ」

2人の様子を地面に座りながら見ていた透一は、少し軽い口調で2人に声をかけた。

その発言に驚く2人。孝利は若干ためらいながらも、持っていたボールを透一に渡す。

「足は大丈夫なのかよ？ 無理しない方が良いぞ？」

「シュートするだけだから大丈夫だって……」

ボールを渡された透一は必死の掛け声と共にゆっくりと地面から立ち上がった。

片膝を下ろして念入りに靴紐を結ぶ。胸苦しい緊張感が透一を重く包み込んだ。

ズボンに付いた砂を払い、微かに震える両足でフリースローのライン上へ移動する。

「ねえ、今やらなくても明日で良いでしょ？ 今日にはもう時間が——」

その足を見て心配した藤倉は、無理に動かこうとする透一を止めようと前に出た。

「——いつボールを投げたって同じだよ。だから俺は今投げるんだよ！」（仮）

そう言つて藤倉の横を通り過ぎる透一。その姿を見た2人は止める事を諦めた。
ボールを地面にバウンドさせてから透一は真つ直ぐに顔をゴールへ向ける。
心配そうに背後を見守る2人を全く気にする様子も無く透一はボールを構えた。

あれは透一が中学生になり、初めて予選を突破して本選へと出場した時だった。

透一のいた中学校はバスケットにそれ程まで力を入れていなかった。予選で姿を消し続けてきた学校の内に含まれており周囲から余り重視はされていない。
それなのに予選を一位で突破して本選を決勝まで進めたのには訳がある。

三年の『西向丈治』にしむかいじょうじという部長の存在があつたからだ……。

繊細なパス回しと抜群の瞬発力。状況に合わせた的確な指示を出してくれる。

ポイントガードとしての才能を持ちながらも、万能なフォワードとしても活躍した。

当時の透一にとっては憧れの存在であり彼が見習うべき存在の人物でもあつた。

部長として積極的に部員全体を纏める姿に、透一は自分に足りない物を発見していた。

それは勇気だった。相手との対立を拒まない姿勢と度胸を兼ね備えたそれでもある。

当時の透一は相手との試合を楽しむ程の技術に重要となる勇気を持

っていなかった。

幼い頃からバスケットを教わっていたとは言っても努力家ではない透一に上達は望めない。

有能な選手ではあった者の隠れた才能を発揮するまでには至っていないかった。

本選の決勝戦。透一のバスケット部員の1人が試合最中に大怪我をしてしまった。

ボールを取ろうとして焦り相手の選手に当たり無理な転倒で足首を痛めてしまう。

一瞬の沈黙に包まれた会場であったが、沈黙は消えてその代わりに緊張感が現れた。

バスケット部の顧問が大怪我をした部員と透一を入れ替える様に指示を出した。

チームの補欠として加わっていた透一は事態の重さを理解して出場を断ってしまう。

チームは同点。残り時間は一分を切っている。相手はバスケットの強豪校である。

人と対決する事への勇気を持たない透一がこの様な場面で活躍できるはずが無い。

透一はそうやって自分を責めた。先輩達が頼んでも彼はその場を動こうとしなかった。

会場の審判から「試合を続行できないチームは負けと判定されます」と注意を受けた。

この大会に出られるのは予め大会登録を済ませたメンバーだけである。

動こうとしない透一にチームの負けを感じ取った西向は透一にこんな声を掛けた。

「桑原。この試合に出るのがそんなに嫌なのか？」

「嫌では無いです…でも、まだ1年の僕には荷が重すぎます…」

「荷が重い？ 何で桑原だけがそんな物を背負っているんだ？」

西向の以外な言葉に反応した透一は下げていた頭を上げて西向の方を向いた。

窮地に立たされているにも関わらず、西向の顔は驚く程に平然としている。

試合に責任を感じないのが西向のやり方であり、これが彼なりの勝利の秘訣であった。

「これは無理な話じゃないぞ。お前にその気があればな。覚悟なんて要らない」

「でも、俺は…まだ、三年の先輩と試合に出た事はないんですけど——」

透一は肩を震わせて自分の足元へ視線を落とす。新品のシューズがちっばけに思える。

それを見た西向は力強く透一の肩を掴んだ。掴んだ手から静かに熱が伝わって来る。

「——いつボールを投げて同じだ。だから今はお前が投げる！」
西向に言われた透一は落としていた視線を上げて静まり返ったコートに目を向けた。

その中央には透一を待っているかの様に2人を抜いたチームのメンバーが集まっている。

彼等は透一を相手にしている西向の指示で動いていた。透一がこの試合に出ると信じて。

この状況を見た透一は西向の言葉に視線で答えた。西向は優しく後輩の背中を押した。

2人がコートに出てチームの集まりに加わってから大会の決勝戦は再開された。

これが後の『勝利のカードセンター』誕生の瞬間でもあった……—

現在の時刻は深夜10時を過ぎており、外も暗く段々と静かになつてきた頃である。

一階の狭い一室に透一と孝利の2人が居た。この2人は共同で同じ部屋を使っている。

学生寮の生徒の中で、共同で部屋を使っている生徒はこの2人を抜いて他には居ない。

「だから止めとけつて言つたんだよ！ 無理しやがつてよ！」

必死でテレビゲームに集中していた孝利の口から透一への注意が飛んできた。

「……別にいいだろ。たいした怪我じゃなかったしさ——」

その言葉を簡単に受け流すと、透一は自分のベッドの上に大の字で横になった。

2人の部屋は二段ベッドが置かれているので足の悪い透一は下のベッドを使っている。

透一は枕元に置かれた教科書やノート類をベッドの端に退かしてゆつくりと目を閉じた。

——あの時、藤倉からボールを貰った透一は2人が見ている目の前でシュートを見せた。

勢い余つて透一は力一杯にボールを投げてしまう。その足が地から離れて飛躍する程に。

ボールを放った透一の体は、地面に足を付けると同時に大きくバランスを崩してしまった。

コンクリートの地面に倒れると片足に鈍い激痛が走る。慌てて駆け寄る孝利と藤倉。

その時、透一の目にはゴールから大きく外れたボールが心虚しく映

つていた――

「――トシ、今からコンビニ行ってくるからさあ、なんか頼む物あるか？」

透一は自分の財布と靴を片手に部屋の窓から顔を出す。外に誰もいない事を確認する。

寮から外出する際は、必ず寮の管理人へ外出の要件を報告しなければならぬ。

中途半端な外出では外に出してはくれない。勿論『コンビニへ行きたい』は通らない。

そこで有利なのが1階の部屋である。この階の窓からなら自由に入りが出来る。

夜の外に遊びに行く。内緒で人を呼ぶ。他の階の生徒から報酬を貰って買い出しに行く。

その全てを1階の部屋が可能にしている。この階の部屋を望む生徒は後を絶たない。

「頼む！？ 誰が必死こいてお前をここまで運んだと思ってるんだよ？」

透一に言われた孝利はキツとその顔を睨み返した。強気に攻める孝利に戸惑う透一。

その意気に負けた透一は両手を上に挙げる。そうして孝利の要求を渋々と受け入れた。

「……分かったよ。奢りますよ！ それで何を買ったら良いんだよ？」

それを聞いた孝利はニヤリと笑い、事前に用意しておいたメモを窓際の透一に手渡した。

「じゃあ、コーラとポテチ、カップラーメンと今週のジャンプに、それから――」

真夏の清涼な夜風を潜り抜けて透一は常に不調の足でコンビニへ向

かつて行った。

その歩道を照らす薄暗い街灯に、多数の羽虫が小さな音を立てて集まっている。

「——遊戯王2パックとチロルチョコ3個……キツチリ1000円分だよ！」

透一は孝利に手渡されたメモを読んだ。そこには細かく品の名前が書かれていた。

「どうして遊戯王なんて買うんだよ……やってないクセによお……」

「——」

コンビニは寮から少し歩いた場所に位置している。近い場所なので透一でも楽に行ける。

（暫くやってないだけで下手に成ったな……あんな位置で失敗する訳が無いのに）

あの瞬間のゴールから外れたボールは、透一の記憶の中に色濃く残っていた。

（『もう、バスケは出来ない』……やっぱりそうなのか？ 諦めた方が良いのか？）

その瞬間を思い浮かべる度に、透一は頭の中で過去の自分と比較させてしまう。

バスケ部の部長を任されるまでにバスケに熱心であった『桑原透一』は存在しない。

一寸の曇りもなく目の前に集中していた昔の自分は過去へと投げ捨ててしまった。

（今まで一回も考えた事なかったな……やっぱり忘れた方が良いのか——！？）

透一はコンビニへ向かう道中で足を止めた。白いゴミ袋が並ぶ小さなゴミ捨て場。

街灯に照らされたゴミは、何週間も放置された証拠である、酷い臭気を放っていた。

普通の透一なら、そんなゴミ捨場など気にも留めずに、『無視』の一択であった。

でも今は違う。その目は『驚き』に満ちた素の感情を隠さずゴミ捨場へ向けていた。

白いゴミ袋の上に、小さな『人』の姿が目映ったからである。

その体は酷く痩せ細って見える。顔は長い黒髪で隠れて良く見えなかった。

透一は周囲に人がいない事を確認して、ゴミの上に横たわる人の元へ恐々と近づいた。

その人が着ている薄汚れの服からは呼吸の動きが確認できた。この人は生きている。

顔を覆い隠す黒髪に手を伸ばすと、口から出る冷たく弱い息が透一の手に当たった。

透一は髪を上げて顔を確認した。髪の下に見えたのは紛れもなく『少女』の顔だった。

小さな顔は異様に白く人としての生気を失っている。透一は少女の瞳に肝を冷やした。

白い顔に輝く『金色の瞳』。それは人外のそれにも思える程の綺麗な金色の瞳だった。

酷く裏れた頬を動かして口で何かを伝えようとしている。擦れた声が僅かに聞き取れた。

「ア……力……リ……」

少女はそれだけを口にするので力尽きる様にして金色の異様な瞳を閉じた。

呼吸が続いているので死んだ訳ではない。その呼吸が弱く成って行くのは事実である。

困惑した透一はこの少女から手を放す。頭の中から無数の疑問が浮かび上がる。

透一はその全てを振り払い、静かに横たわる少女の脇腹にそっと両手を寄せる。

驚くほど軽い少女を抱きかかえて、透一は重い足を動かしてその場を去って行った。

――

少年はゴミ捨て場で見知らぬ少女に出会った。それは後に起こる全ての始まりである。

それと同時に『桑原透一』という少年の人生を一変させた瞬間でもあった……――

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2084u/>

A K A R I

2011年10月9日09時01分発行